

## 三環系抗うつ薬が効いた強迫性障害

50代 男性 強迫性障害

初診時主訴； 水道栓を何度も確認しないと気が済まない（確認強迫）

生育・生活歴；父は教師。臨床検査技師家族歴；母親が極めて口うるさい。兄が偏屈で癩癩持ち。

既往；特になし。

病前性格；几帳面、生真面目、小心

現病歴；人格障害の兄が父に家庭内暴力を繰り返す始め、母親から毎日“助けてくれ”と電話が入るようになる。以来電話の音が怖くなると同時に、職場の水道栓を何度も点検せざるを得なくなり、退社に1時間もかかるようになる。

診断とその根拠。強迫思考と強迫行為は何度も繰り返される不愉快な常同行為であり、抵抗を試みるが成功してないことから、強迫行為を主とする強迫性障害(F42.1)と診断した。

治療方針と治療経過；X 当院初診となる。当院ではロフラゼブ酸エチルとクロキサゾラムで治療を開始するが効果が十分でなく、4月11日からパロキセチンを投与すると、強迫症状は徐々に軽減して行った。次に9月頃から母の介護や兄の問題行動や本人の課長昇進によるストレスの増加で妻や子供に怒鳴ってしまうようになったが、リスペリドン内用液で解消した。しかしパロキセチンでは強迫の改善が十分でなく眠気も強いなどの副作用もあり、イミプラミンに変更すると強迫症状は徐々に改善し始め、12月には水道栓の確認は二回で終わることができ、職場にも良く適応して欠勤もなくなった。このような改善は、母親の我儘のため介護施設から盛んに訴えられていた苦情の回数が最近めっきり減ったのと、周囲を巻き込み暴力的言動を繰り返していた兄も、母親からの負荷が軽減したのか、かなり温和で協力的になっ

ている等の生活環境面での変化が大きく寄与していると思われる。

考察（本症例で学んだこと）

a) 強迫症状の治療に対して、パロキセチンは従来の成書の記述通りには確認強迫には十分な効果は得られなかった。またマレイン酸フルボキサミンやミルタザピンなども無効であった。一方イミプラミンは副作用もなく顕著な効果を示したことは、三環系の抗うつ剤の有用性も依然として重要であることを示している。

b) 強迫性障害の発症が、自己愛性人格障害の傾向が強い母親の長年の看病と、回避性かつ自己愛性人格障害の傾向が強く、家族へ暴力的言動を繰り返す兄への対応等によるストレスの過重にあるのは明らかであると考えられる。